

げんぺいぬのびきのたき

源平布引滝

〔解説〕

寛延二年（一七四九）大坂竹本座初演。並木千柳、三好松洛による五段続きの時代物です。平治の乱以後、再興を期す源氏の武将らを中心に人々の思いが複雑に絡み合って描かれています。源義朝の弟義賢の最期を描いた二段目「義賢館」、平家方なれども源氏再興を密かに願う者達を描いた三段目「九郎助住家」がよく知られています。

〔あらすじ〕

平治の乱で源氏を破った平清盛は、源氏の再興を恐れて一族の男子を根絶やしにせんと躍起になります。

〔竹生島遊覧の段〕木曾義賢から源氏の白旗を預かった小万（こまん）は、平家の兵に追われて琵琶湖に飛び込みます。溺れかかったところを、平宗盛の船に助け上げられますが、源氏方の女と露見して白旗を奪われそうになります。船に乗り合わせた斎藤実盛（さいとうさねもり）が旗を持つ小万の腕を切り落とし、白旗は小万の腕もろとも流れて行きます。

〈瀬尾詮議の段・実盛物語の段〉

義賢の妻葵御前が身重であったことから、葵御前を匿う九郎助の元にまで詮議が及びます。平家家臣の斎藤実盛と瀬尾十郎(せのおじゅうろう)が、葵御前から生まれた子と見せられたのは、女の腕でした(実は九郎助の娘で、源氏方多田蔵人の妻である小万の腕)。もはや逃れられない状況でしたが、実盛が唐の国の故事を引き合いに出してその場をしのぐことができました。

しかし、瀬尾十郎は納得せず陰で成り行きを窺っていました。そうするうちに葵御前は後の木曾義仲となる男子を産みます。そして事の真相を知った瀬尾十郎が再び姿を現すのですが、小万の遺児太郎吉に討たれます。瀬尾は小万の実の父であり、孫に手柄を立てさせ、生まれたばかりの若君の家来をなれるようわざと手にかかったことを告げて息絶えるのでした。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

竹生島遊覧の段

志賀の浦へと漕ぐ船は平家の公達宗盛君。竹生島下

向の御船、飛弾ノ左衛門お伽の役、石山の月御上覧と
夜の八景月夜かけ、向ふより来る小船は齋藤市郎実盛、
舟印を見るよりもやがて漕ぎ寄せ、船張に手をつかへ、
「若君の御船と見奉る。御機嫌よく御下向恐悦至極」
と相述ぶる。宗盛君おとなしく、

「父上の代参とし、竹生島へ詣でしに、道の風景詞に
は尽されず、その方はいづくへ行くぞ」
とありければ、

「さん候、清盛公の上意によつて、源氏の胤を詮議の
役、瀬尾ノ十郎と某に仰付けられ、瀬尾は先だつて草
津守山の民家を捜し、あれなる明神が茶屋にて出合ふ
約束。一方ならぬ大事の役儀。はやお暇」

と漕ぎ出すを飛弾ノ左衛門

「暫し」

と呼留め、

「もうさば若君初めての御代参。祝うてお盃をも頂戴
し、朧月夜にしくものはなしともうせば、さえぬ月に
て一献ひらに〜」

と留むるにぞ宗盛もとも〜に、

「九重盛のお気に入りすぎなうは帰されず、是非に船

へ」

と仰せも重く、

「然らば御意に任さん」

と、乗りうつれば飛弾ノ左衛門

「ソレ盃改めよ」

と、瓶子へいしもかはり献々に、暫く時も移りしが、なに見
つけゝん飛弾ノ左衛門、船張にかけ上り、

「あれ見られよ実盛。たしか勢田唐崎の辺に多くの松明船の篝火、口論か海賊か」

と、宗盛君も実盛も評議まち／＼なるところへ、小まんは平家の船とも知らず、遊び付かんと心は早鐘、白旗口にひつくはへ、逆手を切つて遊びども、向ふ風に吹戻され、浪にもまるゝありさまを、目ばやき実盛すかし見るより

「アレ／＼／＼あれへたしか女と見えて、海上遙かに遊ぶ者あり。正しく水に溺るゝ体、見捨て殺すは本意にあらず、水練手練の者はなきか。アレ助けよ殺すな」と、いへどあせれど誰あつて、水底知れぬ水の面、飛込む人もなかりける。小まんは一生懸命の、気は鉄石でも風と浪、次第に弱る身の苦しみ、

「へエ、口惜しや。こゝで死ぬるか情なや、せめて最期に親達や、わが子に逢ひたや顔見たや」

と思へば、いとゞ吹流され、船を寄せても隔てられ危く見ゆれば、実盛も『見殺しにする不便や』と、よその哀れを見捨て兼ね、思ひついたる三間權、おっとり海へさんぶと打込み、

「竜神感応いのれや女」

と、呼ばはる声が力草、情の心通じてや、流るゝ權は小まんが傍へ、寄るとそのまゝしがみ付き、一息ほつとついたるは蘇生りたる心地なり。權を、浮木のかた遊ぎたぐり／＼て御船の傍、寄るとそのまゝ実盛が、首筋挿んで船へ引上げ、葉を用ひ身を温めさま、／＼いたはり気を付くれば、小まんは始終手を合せ、

「どなた様かは存じませぬが、神か仏かありがたいお情。わたしは小まんともうしてこの辺の者。年寄った親もあり、七つになる子もござりまする。死んではどうもならぬ命、お助けなされて下されし御恩はいつか

報ぜん」

と、涙とともに一札を、聞いて実盛、

「イヤその方が運のよき。あれに御座なさるゝは平家の御公達宗盛公。御船のおかげで助かったお礼もうせ」

と、いふに恟り、

「なにこれは平家の船とや。ハアおありがたうござりまする」

と、いふ声ともに身をふるふ。飛弾ノ左衛門目に角立て、

「平家と聞いて驚くしやつ面。まづおのれはなにゆゑに、女の身にて海上を遊ぎしぞ」

「イヤそれには、ちつとやうすが」

「サアそのやうすぬかせ」

「アイ〜」

とはいへどいひ兼ねる。折もこそあれ高橋が家来ども、

小船に取乗り声々に

「その女こそ源氏方白旗隠し持ったるぞ。油断あるな」と呼ばはる声。

「さてこそこやつ曲者」

と、飛弾ノ左衛門飛びかゝり、腕捻上ぐれば小ままは声上げ、

「ナウけふはいかなる悪日ぞ。死ぬる命を助かりて、嬉しと思ふ間もなく、この修羅道の責めはなにごと。情なや浅ましや」

とはぎしみ歯ぎり身を震はし、もだえ歎けば

「ヤアなにほぎく。サア命が惜しくば白旗渡せ」

「イ、ヤ渡さぬ。女ながらも見込まれて、預った物むぎ〜と、たとへ死んでも白旗放さぬ」

どしようほね
「ヤア胴性骨のふとき女」

と、懐搜せば右手に差上げ、

「かう握つたら金輪奈落。旗は切れてもちぎれても、一念凝つたこの手のうち、やみくくと渡さうか」

と、あせれどさすが女業、すでに危きところを実盛、

「につくき女」

と旗の手を、ぱつしと切つて水中に白旗もろとも、

「南無三宝白旗取らんと過つたり、ハ、はつくくく」

と仰天は鈍忽と見えて、情かや。

「ヤアく船頭ども白旗が、水に慕うて流れしぞ。艀

權をはやめて追駈けよ。はやくく」

と疾風はやての下知。畏つて船人が櫓拍子揃へて

「えいさっさ、えいさくくえいさっさ」

さっさ逆まく浪切つてあてどもなしに

瀬尾詮議の段

出でて行く。

世に連れてかはる住居や憂き思ひ、義賢の御台葵御前、たゞならぬ身の満つる月、かげを隠する一間より、打ちしほれ出でたまひ、

「ナウ内儀。いかふ鳥の鳴く音も悪し、心にかゝるは小まんのこと。便りもないか音もせぬか。九郎助も太郎吉もまだ戻らずや」

とありければ、

「またわつけないお案じ。連合ひの話のやうすではまんはナ、大かた折平の後を慕ひ、あてどもなしにいたものでなござりましよ。鳥鳴きが悪いとおっしゃれど、ありや御平産があらふと悦び鳥。親父殿はお前へ上げまするといふて、近江の名物源五郎鮒を打ちに

いかれました。モ綱の目に風溜ると物々の息精でも、お産を安うさせまする」

と力付けても、付けられても、昔にかはる落人の御身の上ぞいたはしき、主九郎助綱提げ戻るを太郎吉先走り、

「祖母さん大きなものがかゝった。おれが見付けた、おれが取った」

と小踊りして悦ぶにぞ、

「フ、出かしやつた／＼。アレお聞き遊ばせ、御運の鮒をり大きなものがかゝったといな。ドレ見ませうか

親父殿」

「見せうとも／＼。イヤモけうといものぢや。悔りすなよ。飛びもはねもせず動きもせぬ。廿四五年ものゝ人魚、隠すが秘密」

と表引立て、

「よつぽどけうな源五郎鮒。驚くまい」

と綱よりもはふり出したは女の片腕。娘の手ともしらでびつくり、

「ソリヤ見たか。羅生門から奪いに来る。きほひ口でも伯母に見せな」

と仇口いふても、傍へも寄らず、太郎吉はをかしがり、
「テモ臆病な、死んだ手がなんでこはい」と打笑ふ。

「イヤまた気味がようもない。コレ親父殿、コリヤまあどこから取ってござった」

「されば草津川の下は湖から入込み。鮒の溜りがあらうと綱持つてかゝった向ふへ、その肘が流れてくる。孫めが見付けて『取ってくれ』とせがむ。『ア、よし、ないもの』と思へど、手に持ったものが好もしきさに、一綱くらはして引上げ、握り詰めてゐる白絹を放して

見れどもなか／＼放れぬ。いかなる者の肘ぞ申ふても
やらふし、第一この絹をはづしてみたさに持つて戻つ
た。御台様とそちとして、腕首しつかり持つてゐよ。

力に任せもぎ放さう。サア持つた／＼」

と差付けられ、こは／＼ながら、御台とともに、手を
かけて引けどしやくれど放ればこそ、ほつとあぐんで、

「コリヤいかぬわ。いっそ手のうち切り割ろ」

と立つを、太郎吉、

「コレ爺様、おれ放さふか」

と立寄れば、

「ア、おけ／＼。人形の首ぬくとは違ふ。持つた絹を

ばやぶりおろ」

と叱れど聞かず、

「イヤ／＼／＼、あの持つた指を一本づつ放せば放れ

る」

と大ませ者のわんぱくが手をかくれば、忽ちに五つの
指は一度にひらき、白絹わが子へ渡せしは、肘に残る
一念の思ひはいとゞ哀れなり。不思議ながらも絹押開
き、見るより御台は、

「ヤアこれは源氏の白旗、みづからが家の重宝」

「エ、スリヤこの白旗持つたこの手は」

といふたばかりに九郎助、御台。虫が知らして女房も、

「もしや娘の肘か」

といはず語らず三人が、顔見合せて一時にほつと溜息
つくばかり。かゝる折から平家の侍、斎藤市郎実盛、
瀬尾ノ十郎兼氏、仁惣太が訴人によつて葵御前を詮議
の役。村の庄屋付従ひ、

「すなはちこれが九郎助が所。御案内」

と戸口にかけ寄り打ちたゞき、

「お上よりお尋ねのことあり。明けた／＼」

とつかふど声。

「さては」

と九郎助、

「コリヤ女房。平家方より源氏の胤を探すと聞いた。

まづ御台様を忍ばせよ。まさかの時はコリヤコリヤかう」

と耳へ吹込み奥へ追ひやり門口明くれば、兩人はやがてうちへぞ入りにける。分けてけにくき瀬尾ノ十郎、床几にかゝり、

「ナニ九郎助といふはおのれか。木曾の先生義賢が女房葵といふ孕み女、匿ひ置いたる由これへ引出せ。詮議することあり」

とてつぺい押しを、少しもひるまず、

「これは思ひもよらぬお尋ね。さやうなお方このうちには」

といはせも立てず、

「ヤアぬかすな。おのれが甥の矢橋の仁惣太、この瀬尾へ兩度の注進。遁れぬところ白状ひろげ」

「ア、イヤたとへ甥がもうしませうが、この埴生にさやうなお方。毛頭覚えござりませぬ」
といひ放せば、実盛。

「ア、コリヤ九郎助とやら悪い合点。当時平家の威勢をもつて、源氏の胤を胎内まで御詮議。懐妊の葵御前匿ひあること現在の甥が訴人。サコトをよつく聞け。たとへ源氏の胤なりとも、女ならば助けよと小松殿の情。それにたつて争ふと踏込んで家捜し、ためになるまい白状」

とことをわけたる一言に、『はっ』と吐胸の思案も出でず、是非におよばず手をつかへ、

「なるほどゆゑあつて葵御前をかくまひもうし、当月

が産み月、いまだ女とも男とも定められぬ懐胎、御平産あるまでを私にお預け下され」

と願へば、十郎、

「ヤアしにぶとい親仁め、今日産むか明日産むかとべん／＼と待たふか。胎内まで捜せとある御上意は、腹裂いて見よとある仰せ。すなはち裂く役は某。検分はこれなる実盛。葵御前をこれへ出せ。腹裂いてみて女ならば助けてくれる。隙とらずはやく／＼」

「アノ懐胎を腹裂けとある」

「オ、サ清盛公の仰せなるわい」

「ホイそれはあんまりお胴慾。一人ならず二人のお命、なにとぞお情で当月中を」

「イヤソリヤならぬ」

「サアそこをどうぞ」

「ヤアしちくどい親仁め。奥へ踏込み引きずり出し、

源氏の胤を絶やしてくれん」

と立つを九郎助、

「ヤレ待つてお慈悲／＼」

と手に縋り歎きとゞむる折からに、にはかに騒ぐ一間のうち、女房の声として、

「九郎助殿々々々々。御台様が気がついた。ちやつと／＼」

と呼びたける。『はっ』と驚きかけ行くを、瀬尾はやがて引捕へ、

「ヤアどこへ／＼。腹裂かれるがせつなさに、産んだとぬかすが合点がいかぬ。まこと産んだが定ならば、そのがきこれへ連れてこい。たゞし踏込み見届けふか。なんとぢやどうぢや」

とせり立てられ、のっ引きならぬ手ごめを見るより、是非なく／＼も女房が錦に包み抱きかゝへ、

と睨み廻せば、実盛。

「アイヤ例しないとはもうされず。かゝる不思議も世にあること」

「ム、ヤコリヤ聞きごと。かゝる例しがさいづくにある」

「ホ、もうさぬとて御存じあらん。唐土楚国の後桃容夫人、常にあつきを苦しんで鉄の柱をいただく。その精

靈宿つて鉄丸を産む。陰陽師占ふて劍に打たす、干将

莫耶が劍サこれなり。察するところ葵御前も常に積衆の愁あつて、導引鍼医の手先を借り、全快の心通じ自

然と孕めるものならん。ハテあらそはれぬ天地の道理。

今よりこの所を手孕村と名づくべし」

とさもありさうにいひしより、今もその名をいひ伝ふ。

さすがの瀬尾もいひ廻され、

「ハテ珍らしい肘の講釈。その旨清盛の御前へ参り披

露する。その腕きつと預けたぞ」

「ヲ、申訳は実盛が胸にあり」

「ホウ腹に肘があるからは、胸に思案がなくちや叶はぬてハ、ハ、ハ、ハ。先へ帰つて注進」

と表へ出でしがきつと思案し、思い付いたる詮議の種。

「ムそれ〜」

とうなづいて逸足

実盛物語の段

出して走り行く。

音鎮まれば葵御前、太郎吉連れて立出で給ひ、

「聞き及びし実盛殿、お目にかゝるは初めて、段々のお情、忘れ置かじ」

とありければ、

「これは／＼ご挨拶、某もとは源氏の家臣。新院の御

謀反により、思はずも平家に従ひ、清盛の禄を食むといへども、旧恩は忘れず、今日の役目乞受けたも、危きを救はんため。しかるに不思議なはこの肘、矢橋の船中にて某が切り落とした覚え有り。確かにこの手に白旗を持ちつらん。御存知なきや」

と尋ねれば、

「成程／＼。その旗も手に入りしが、その切つたとある者の年恰好は」

「ホウ年頃は二十三四、背高く色白なる女。たしかに名は小まん」

と聞くより九郎助夫婦共、

「ナウそれは、わしが娘の小まんどちや」

「まんどちや」

と狼狽へ歎けば、御台も共に、

「さてこそそれよ」

と骨身に堪へ、太郎吉はたゞうろ／＼と訳も涙に暮れ居たる。九郎助は老いの一徹、息も涙もせぐりかけ、
「コレ実盛殿、娘が肘はなに科あつて切つたぞ。エ、惨たらしいことしやつたのふ。この娘には、六十に余る親もあり、また七つになる子もあるぞや。よもや盗みも騙りもせまい。なに過りでなに科で、サア、サそれ聞かふ／＼」

と、せちがひかゝれば、女房も、

「ヲ、さふぢや／＼親父殿。骸は何処に捨てゝある。ついでにそれも聞いて下され」

「ヲ、それもナア、今頃は犬の餌食、当座に死んだか生きて居るか、サア有りように云へ、エエ云はぬか。」

「情けぢや、云ふて下され」

と夫婦が泣き出す心根を、思ひやつて実盛、

「さてはその方達が娘よな。聞きも及ばん宗盛公、竹生島詣下向の御船、瀬田、唐崎の方へ漕ぎ出す所に、

矢橋の方より二十余りの女、口に白絹引き銜へ、抜き

手を切つてさつと、浮いつ沈みつ泳ぎ来る。あれ助け

よ、あれ殺すなど、舷叩いて焦れども、折から比叡の

山おろし、柴舟の助けもなく、水に溺れる不憫さに、

三間櫂を投げ込んで、念なう御船へ助け乗せ、『コリ

ヤ如何なる者ぞ』と尋ぬるうち、追手と見えて声々に、

その女こそ源氏方、白旗隠し持つたるぞ奪い取れく

と、呼ばはる声を聞きしより、船に居合わす飛驒の左

衛門、飛びかゝつてもぎ取らん。イヤ渡さじと女の一

念、もしや白旗平家へ渡らば、末代まで源氏は埋れ木、

女が命に代えられずと、白旗持つたる肘をば、海へざ

んぶと切り落とし、水底へ沈みしと船を汀へ漕ぎ戻し、

骸は陸へ上げ置きしが、廻り廻つてこのうちへ、白旗

もろとも帰りしは、親を慕ひ、子を慕ひ、流れ寄つた
か不憫や」

と涙交じりの物語。聞く程悲しく夫婦は咳き上げ、

「道理で孫が目にかゝり、取つてくれいと腕白も、虫

が知らした親子の縁。三人かゝつて離れぬ白旗、心よ

う離れたは、我が子に手柄させたさか、死んでもそれ

ほど可愛いか、手に留まった一念が、物云ふことはな

らぬか」

と御台もろとも取り縋り、泣くより他の事ぞなき。涙

おさへて太郎吉は、ずつと立つて、

「ヤイ侍、よう母様を殺したな」

と、ぐつと睨めたる恨みの眼。自然と実盛胆に堪へ、

「ホ、ウ健気なり逞しや。母が形見はソリヤそこに」

と、云ふに駆け寄り肘を抱き、

「母様呼んでこの手をば、骸へ接いで下され」

と、彼方へ持ち行き、此方へ頼み、身を投げ伏して泣き沈む。かゝる歎きの折も折、所の者ども死骸を持ち込み、

「ア、コレ／＼、これの娘が切られて居た。ガ肘が片し紛失した。他は満足渡します」

と、云ひ捨て、こそ立ち帰る。

「ヤレ太郎吉よ、母が顔これが見納め、見ておけ」

と云ふに駆け寄り抱き付き、

「コレナウ母様拝みます。無理も云ふまい。云ふこと

聞こう。物云ふて下され。祖父様詫び言して下され」

と、泣き焦がるれば、

「ヤレ、詫び言に、／＼及ぶか。此方より彼方から、

物云ひたうてなるまいけれど、この世の縁が切れてはナ、モ互ひに詞は交はされぬ。死骸のありかをどうぞ

まあ、尋ねふかと思ふたれど、なまなかに持つて戻り、

顔を見せたら、たまるまいと、そちが寝るまで待つて居た。へエ男勝りな女であつたが、それが却つて身の仇となつて死ぬるか可愛や」

と、悔やみ涙に女房も、

「さぞ死にしながらに此方や俺に、云ひたい事があつたである、太郎吉よ、水汲んで櫛の花で手向けてくれ」

「イヤ／＼俺や嫌ぢや、母様が物云はにや聞かぬ／＼」

と腕白も、

「ヲ、そればかりが道理ぢや」

と、思ひやるほどいじらし。実盛始終手を拱き、人々の愁嘆に、涙と浮む一工夫、思ひ付いて傍に立寄り、

「かく甲斐々々しき女、たとえ片腕切つたりとて、即

座に息も絶えまじきが、白旗を渡さじと、一心腕に凝り固まり、五臓に残る魂なし。再び肘を接ぎ合はさば、

靈魂返り息することもあらん。誠にかの眉間尺が首、

三日三夜煮られても、凝つたる一念恨みを報ぜし例もあり。今この肘に温り有るも不思議。又は御旗の威徳も」

と、切つたる肘に白旗持たせ、物は試しと接ぎ合はせば、我が子を慕ふ魂魄も、御旗の徳にや立ち帰り、息吹き返し目を開き、

「太郎吉何処にぞ、太郎吉」

と、云ふにびつくり、

「ヤレ蘇つたは、此処に居る、此処に〜」

と取り纏る。

「ナウ御台様、白旗は御手に入つたか。太郎吉にたつた一言、云ひたい事が」

とばかりにて、いまぞはかなくなりにつけり。

「コリヤ小まんやい、コレ小まんいのう、小まんやい、

〜、ハア可愛や〜、モウそれが遺言か。云ひ

たい事とは、オ、合点じゃ〜。そちが筋目の事である。イヤ申し、何を隠しませうぞ、この者は二人が中の娘でもござりませぬ。堅田の浦に捨て〜ござりました。コレ御覧じて下さりませ。この懐に持つております用心合口、金刺と云ふ銘を彫りつけ、氏は平家何某が娘と、書付もござりますれば、もし親達が尋ねて来

るか、取り返しにも来ふかと、そればかりを案じて居て、今死なうとは〜存じませなんだ。生き返つたがなほ思ひ、あんまりこれは胴欲な、本意ない別れ」と取り付いて、わつとばかりに泣き居たり。共に悲しむ葵御前、只ならぬ身にせきのぼす。五臓の苦しみ御産の悩み。実盛驚き、

「ヤアコリヤ夫婦の者、泣いているところでなし。御台は産の悩み有り。労り申せ」

と一間へ伴ふ間もなく、用意の屏風引き廻し、お腰抱

くやら早めやら、祖父祖母が介抱に、心利いたる実盛が、かの白旗を押立つれば、実にも源氏の守りの印。

若君やすやす御誕生。初声高く上げ給ふ。父義賢の幼名を、直ぐに用いて駒王丸、後に木曾の義仲と名乗り給ひし大将はこの若君の事なりし。九郎助歎きも打ち忘れ、

「お生まれなされたいと様の、御家来にはこの太郎吉」
「フ、それ／＼、かかるめでたい折なれば、実盛様おとりなし」

と、願へば肯き、

「ホ、ウ幸ひ／＼、死したる女の忠義を思へば、骸は灰になるとても、一心の凝り固まりし肘、うかつには焼き捨て難し。その手をすぐに塚に築き、太郎吉が名を今日より、手塚の太郎光盛と名乗らせ、御誕生の若君、木曾殿へ御奉公、即ちこれが片腕の、よい家来」

と披露する。御台は気色を改め給ひ、

「尤も父は源氏なれども、母は平家の何某が娘と九郎助の物語。一家一門広い平家、もし清盛が落し子も知れず。まづ成人して一つの功を立てた上で」

と、仰せに実盛、

「ハ、アごもつとも至極々々。まづこの所に御座あつて、若君御誕生と聞こへては一大事。義賢の御生国信州諏訪へ立ち越へ、御家来権の頭兼任に預け、御成人の後再び義兵を上げ給へ。九郎助夫婦御供」

と、勧めに任する表の方、いつの間にかは瀬尾の十郎、小柴垣より現れ出で、

「ヤアそりやならぬ／＼。かくあらんと思ひし故、死骸を持たせ窺ひ聞く。義賢が倅、男子とあれば見逃しならず。いで請け取らん」

と駆け入れば、実盛やがて立ち塞がり、

「ア、これ〱瀬尾、貴殿も生き通しにもせまい。海とも山とも知れぬ水子、見逃しやるが武士の情」

「ヤア云ふな実盛。さては汝二心な。平家の禄を食んで、源氏の胤を見逃す不忠。ぐつとでも云ふて見よ。

自体このくたばつた女めが白旗奪い取つたる故、平家は夜が寝られず、思へば〱重罪人め」

と、死骸を立蹴にはつたと蹴飛ばし、

「サア生まれた餓鬼めを渡せ〱。異議に及ぶと撫で切り」

と飛んでかゝるを太郎吉が、母の譲りの九寸五分、抜くより早く瀬尾が脇腹、ぐつと突いたる小腕の力。これはと人々驚く中、

「よう母様の死骸をば、踏んだな、蹴たな」

と、挟りくる〱流石の瀬尾、急所の痛手にどつかと伏す。

「ヤレでかしやつた〱」

と誉めそやしても夫婦共、後の難儀を思ひやり、胸轟かすばかりなり。暫くあつて瀬尾の十郎、

「何と葵御前、これで太郎吉は、駒王殿の御家来にサアならふがの。平家譜代の侍、瀬尾の十郎兼氏を、討ち止めた一つの功。成人を待たずともノウコレ召し使はれてくださりませ。誠に思へば一昔、部屋住の折から、手廻りの女に懐胎させ、堅田の浦へ捨て置いたる平家の何某は某。また廻り逢ふ印にと、相添え置いたるソレこの劍、廻り廻つて我が体、助をかけて金刺となつたも、孫めが不憫さ故。初めての御家来に、平家の縁と嫌われては、娘が未来の迷ひと云ひ、一生埋もれる土百姓。七つの年から奉公せば、木曾の身内に一と云ふて二のなき家来。とりなし頼む実盛殿。サア瀬尾が首取つて、初奉公の手柄にせよ」

と、非道に根強き侍も、孫に心を乱れ焼き、スラリと抜いてわが首へしつかと当て、両手を掛け、エイ／＼と引き落とす。難波瀬尾と平家でも悪に名高きその一人、最期は流石健気なる。

夫婦も泣く／＼その首を太郎に持たせ御目見得、葵御前は若君を抱き、

「初めての見参に、平家に名高き侍を討取つたる功名、主従二世の奇縁ぞ」

と仰せを聞くより太郎は突つ立ち、

「サアこれからは俺は侍。侍なれば母様の敵、実盛やらぬ」

と詰めかけたり。

「オ、あつぱれ／＼さりながら、四十に近き某が、幼き汝に討たれなば、情けと知れて手柄になるまい。若君ともろともに、信濃国諏訪へ立越へ、成人して義兵

を挙げよ。その時実盛討手を乞請け、故郷へ帰る錦の袖、翻して討死にせん。まづそれまではさらば／＼、いづれもさらば。家来共、乗り換へ引け」

と呼ばはれば、「はつ」と答えて月額、栗毛の駒を引出す。手綱押取り乗る中に、何処に隠れ居たりけん、矢橋の仁惣太躍り出で、

「ヤア先達で注進の褒美を無にしたその代はり、実盛が二心で駒王丸を北国へ下す段々、すぐに注進、詞番ふた争ふな」

と云ひ捨て、駆け出す。実盛すかさず馬上より、用意の鍵縄打掛くれば、首に掛かつてきり／＼、引寄せ引上げ引掴み、

「あつぱれ己は日本一の大慾無道の曲者め」
と、鞍の前輪へ押付けて、首搔切つて捨て、ンげり。その後手塚の太郎、母が形見の小合口、金刺取つて腰

にぼつ込み、綿繰馬にひらりと乗り、

「ヤア〜実盛、母様殺して逃ぐるか往ぬか、もう俺が名は手塚の太郎、コリヤコノ金刺の光盛なり。往なずと此処で勝負々々」

と呼ばはったり。

「ヲ、〜でかいた〜。蛇は寸にしてその氣を得る。自然と備はる軍の広言。成人して母の仇、顔見覚えて恨みを晴らせ」

「イヤ〜申し、孫めが大きうなる内には、其許様は顔に皺、髪は白髪でその顔変はる」

「ムウ〜〜ハ、〜、成程、その時こそ鬢髭を墨に染め、若やいで勝負を遂げん。坂東声の首取らば、池の溜まりで洗ふて見よ。軍の場所は北国篠原、加賀の国にて見参々々」

「実にその時にこの若が恩を思ふて討たすまい」

「生き長らへて居つたらば、この親父めが御旗持」

「兵糧炊くは私が役」

「首切る役はこの手塚」

「ホ、ウ、互ひに馬上でむんずと組み、両馬が間に落つるとも。老武者の悲しさは、軍に仕疲れ、風に縮める古木の力も折れん。その時手塚」

「合点々々」

「ついに首をも搔落とされ、篠原の土となるとも、名は北国の巷に上げん。さらば〜」

と引別れ、帰るや駒の染手綱、隠れなかりし弓取りの名は末代に有明の、月もる家を後になし、駒を早めて立ち帰る。